

ジュルチャーニイ党は生き残れるか

社会党の分裂

今次の危機とは文脈を異にするが、社会党のジュルチャーニイ・グループが社会党を離れ、独立した政治グループを結成することになった。社会党内で主導権を取る見通しがなくなったジュルチャーニイ・グループは、**Democratic Coalition** という名称で政党登録した。ただし、既成政党から離脱した議員は 6 ヶ月の間無所属になることが国会法で定められているので、政党として国会内で活動できるのは来年になる。

ジュルチャーニイはカネの力でグループをまとめているが、その資金源は真っ黒だ。旧体制の共産党人脈や共産党青年同盟人脈を利用した国家・党資産の売買や、メツジェシ政権時代からの社会党の利権漁りで蓄えた資産が元手だ。

ジュルチャーニイの政治理念が今回の行動で明確になった。社会党が掲げる社会正義とは何の関係もない、ネオリベリズムがその本質だ。副党首の一人に任命されたバウエル・タマーシュは、ハンガリーを代表するネオリベリズム（市場原理主義）の旗手だ。しかも、バウエルは「オルバン憎し」で凝り固まっている。その彼がジュルチャーニイの片腕になった。もう一方の片腕は、ジュルチャーニイをヨイショした「ジュルチャーニイ伝」を出版して、ジュルチャーニイの庇護を受けて先の選挙で出馬したが落選したデブレツェニイ・ヨージェフ。

ジュルチャーニイ党が **SZDSZ** の再生党と言われるのは、バウエル・タマーシュの存在が大きい。バウエルは学生時代（経済大学）には毛沢東主義者として活発に活動していたが、社会主義労働者党（共産党）の処分を受けなかった。バウエルの両親は国家保安警察 **AVO**（秘密警察）の創設時からの職員で、とくに父親のバウエル・ミクロシュは有能な取調官として知られていた。国際的な事件になった外務大臣ライク・ラースローの処刑事件では取調官として活躍した。当時、カーダール・ヤーノシュは政治局員兼法務大臣で、の取り調べの責任者だったから、カーダールとバウエルは上司と部下の関係にあった。56年動乱後に、バウエル・ミクロシュは保安警察を離れ、貿易会社の要職を得たが、バウエルの息子が騒いでいるのなら、大目に見ようというのがカーダールの姿勢だっただろう。

バウエル一家と **SZDSZ**

バウエル・タマーシュはこうした家族の経歴について、劣等感を抱いていたのではないだろうか。それが独りよがりて常に過激な行動として噴出した。ポーランドの連帯運動が始まると、今度は連帯支援の活動家になり、ハンガリーの体制が揺れ始めると改革派経済学者として名を売り出した。筆者はこの頃に彼を一度、日本へ招聘したことがあるが、ちよつと変わった性癖に驚いた記憶がある。

体制転換後に、バウエル・タマーシュは SZDSZ の国会議員になったが、1998 年から 2002 年の FIDESZ 政権時代に、父親の過去が国会で暴露されてから、反 FIDESZ 反オルバンに凝り固まった。バウエル・ミクロシュが保安警察の取調官として、1950 年 9 月のリース法務大臣の取調で拷問死させたことが国会で取り上げられ、その調査を当時の MDF 法務大臣ダーヴィッド・イボヤが約束し、バウエル・タマーシュが政治的陰謀だと反論したあたりから、SZDSZ 内部でのバウエルの立場が微妙になった。SZDSZ にはライク・ラースローの息子など、旧体制の犠牲者の家族が議員になっていたから、バウエルとの間に溝ができたのである。

このようなバックグラウンドをもつバウエルが、同じ旧体制時代の共産党政治局員アプロー・アンタルの娘で、体制転換以後もにらみを利かせたアプロー・ピロシュカを姑にもつジュルチャーニイと組んだのが、新しくできたジュルチャーニイ党である。これを支えるイデオロギーは社会主義とは無縁の新自由主義。ジュルチャーニイが社会党を離れる十分な理由があった。